

近世絵図でみる阿波郡と伊沢村の歴史的景観

地理班 (徳島地理学会)

羽山 久男^{*1} 木内 晃^{*2}

要旨：近世後期の阿波郡や村を対象とした天明3年(1783)「阿波郡絵図」(見取り図)、文化5年(1808)の「阿波郡分間絵図」(実測図)と、同5年の「阿波郡伊沢村分間絵図」(実測図)が阿波郡内で個人蔵として現存する。これらに内包される空間的な絵図情報を克明に読み取り、これからトレース図(歴史地図)を作成し、歴史空間である近世の阿波郡と伊沢村の歴史的景観や地域像を復原する。

キーワード：阿波郡絵図, 阿波郡分間郡図, 伊沢村分間絵図, 歴史的景観, 宗教景観, ランドマーク

1. 「天明三年(1783)阿波郡絵図」と景観

近世絵図には、豊富な絵図情報が充満している¹⁾。例えば、当時の河川の流路・山・河谷・平野・原野・荒地・海岸のような自然地形や、田畑などの土地利用、農民の屋敷地、在所や山分の絵図にみえる谷地名のような今日では忘れられたような小地名等が描かれる。さらには寺社・堂宇・小社等の村人の日常生活と深く結びついた様々な宗教景観、村内の道・街道、用水路、地域の目印となる様々なランドマーク等が描かれている。ここでは近世阿波郡の景観を復原するのに重要な史料となる3点の絵図を取り上げ、トレース図(歴史地図)を作成し、阿波郡の景観や、風土・地域像をどのように認識していたのかを明らかにしたい²⁾。

天明3年作成の「阿波郡絵図」³⁾は縮尺約15,000分の1程度の彩色の手書きの見取り図である。阿波郡内の31ヵ村を対象とした中心集落や寺社・堂宇・小社等の宗教施設、さらに村境、撫養街道と里道、一里松、制札場等のランドマークや様々な景観要素を描いた絵図として貴重である。図1は宗教施設を中心としてトレース図化したものである。図は南の

吉野川筋から鳥瞰的に北の複合扇状地や阿讃山脈をみており、山稜、河川、社寺等が絵画的表現で描かれる。阿讃山脈の山塊は南を向いており、その南に複合扇状地や吉野川沖積平野があり、撫養街道(太朱線)と吉野川(太青線)が平行して東西に走る。河川名は「吉野川筋」と「日開谷川筋」を除いて記されないが、東に九頭字谷川、中央に日開谷川、西に大久保谷川、伊沢谷川が描かれて吉野川に注いでいる。さらに、村界が細墨線で示され、天明期の絵図で村域が面的に示されるのは藩用の「国絵図」である蜂須賀家文書「阿波国画図」⁴⁾以外に管見していないが、その意味で本郡図は注目される。

図2は現阿波市土成町の浦池村・成當邑・水田邑・秋月邑・伊月邑と同市市場町の切幡村・山野上村(邑・村は原図による)付近を示している。主要なランドマークである浦池・薬王寺大権現・蓮生寺(浦池村)、円光寺・薬師堂(成當邑)、光福寺・王子権現(秋月邑)、八幡宮・御制札所(八幡町)、切幡寺・本堂(五間・七間)・仁王門・中門・氏神宮(切幡村)、大内大明神(伊月邑)、大野寺・牛頭天王(山野上村)等が克明に描かれており、当時の宗教景観⁵⁾がよくわかる。

*1 徳島市城南町 *2 上板町立東光小学校

八幡宮・氏神宮・案内宮が見えるが、前出の『阿波国神社御改帳』⁸⁾では、十二社大権現・八幡宮・案内社の三社しか記されないことや、他村でも同帳と一致しない事例が多い。

さらに、町並みが描かれるのは「郷町」である八幡町と市場町で、前者には「御制札所」(伊沢邑にも「制札場」がみえる。)、扇状地や吉野川沿いの荒地を開墾した半農半士であった原士が多く住んだとされる興崎村は「原土町」とある。『阿波町史』⁹⁾に記される阿波郡内36軒の原士のうち、柿原村16軒、香美・知恵島村は各4軒がみえ、絵図には興崎村の「原土町」が描かれている。さらに撫養街道沿いの秋月村、水田村、香美村、市場町、伊沢村の四箇所には「一里松」が描かれる。また讃岐国境の大影村の日開谷上流には「美馬郡讃州三ツ境傍示たを」と記され、犬墓村には「御番所」が、美馬郡曾江山境の伊沢山には阿波郡内で崇拝された聖なる山である「妙体権現」(妙体山標高785m)が鎮座する。

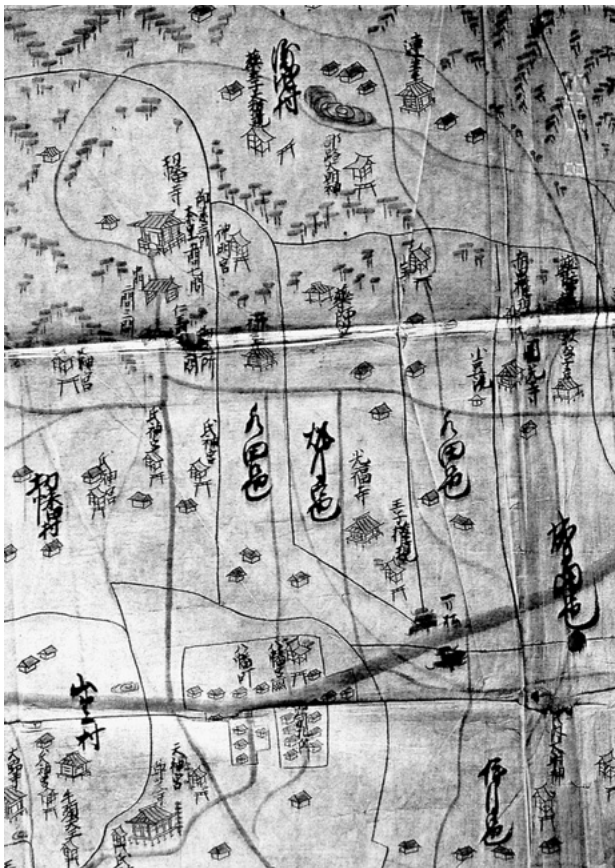


図2 「天明三年(1783)阿波郡絵図」の浦池・成當・伊月・秋月・水田・切幡・山野上村付近、太線は撫養街道

2. 「文化五年(1808)阿波郡分間郡図」と景観

文化～文政期にかけて徳島藩絵図方(測量方)の岡崎三蔵を中心として作成された縮尺約18,000分の1の「分間郡図」は縮尺約1,800分の1の実測「分間村絵図」から編集された絵図で、近世後期の郡域や村落景観等を空間的に表現したものとして重要である。現存が確認されているものは本図のほかに、①名東郡分間郡図、②板野郡分間郡図、③阿波麻植両郡絵図、④名西郡分間郡図、⑤美馬郡分間郡図、⑥勝浦郡分間郡図である¹⁰⁾。

本図に花形磁石方位が東西南北の四箇所みえる。凡例には「絵図面二分(0.6cm)一町(109m)／紫筋境、御国境／墨筋、村境／朱筋、道／黄筋、堤／薄墨、地面畠／黄、山／藍、水／薄萌黄、草渡／薄墨・白星、川原／鳥井、神社小社除之／家、寺院」とあり、一定の様式に基づいて徳島藩領内の村々を描いた藩政用の基本絵図である。本図は藩に上納した清図の控である。

図3に「阿波郡分間郡図」の地形表現を中心としたトレース図を、図4には現阿波町に当たる勝命村から伊沢村、東林村付近を示した。その特徴は村域の空間領域を太墨線で示し、地形表現の明瞭さで、阿讃山脈の山麓線や河谷線が鮮明に表現されていることである。明治20年頃作成の輯整二十万分一図¹¹⁾と比較しても遜色ない精密さを有する郡図である。さらに山麓から南流する河川が精密に表現されている。

東から西にみると河川名は記されないが、熊谷川・九頭宇谷川・指谷川・柿ノ木谷川・鶯谷川・金清谷川・日開谷川・坪井谷川・別埜川・法寺谷川・松崎谷川・大久保谷川・伊沢谷川・芝生川・明谷川・東王子谷・王子谷・吉谷川・長光川・西谷・郷司谷・北岡谷等の谷線が精密に表現されている。また、東林村、西林村の隆起扇状地と吉野川氾濫原との段丘崖や、吉野川の旧河道(西林村)、浦池・上池・城跡(伊沢城跡)の東堀にあたる蛭田池(伊沢村)や倉谷池(東林村)と吉野川の河跡湖等(西林村)が描かれている。

本図には241のランドマーク等が表現されている。表現内容の中心は宗教施設の109(45.2%)で「阿波



図4 文化五年阿波郡分間郡図の勝命・中野・大俣・伊澤・東林村付近

箇所みえる。さらに、撫養街道以外の村内の主要な生活道（里道）が細朱線で示され、近世後期の村落景観や当時の空間認識がうかがわれる。

3. 「文化五年（1808）阿波郡伊沢村分間絵図」と景観

1) 伊沢村在所（里分）絵図

伊沢村は南の吉野川左岸（伊沢市）から北端の伊沢谷上流（大影村境）まで南北約10.5km、東西約3km（最大部）に及ぶ広大な村域を有する大村である。このため、本図は「浜分」（伊沢市、吉野川左岸部）と「在所」（平地部）、「山分」（伊沢谷川上流）の三つに分割されている。絵図のサイズは大きく、①大内家本、②永井家本、③富永家本、④森文庫本の4点が現存する¹³⁾。②でサイズをみると「浜分」は縦110×横186cm、「在所」は260×189cm、「山分」は355×202cmと巨大な村絵図である。

①の「浜分」に徳島藩の実測の「分間村絵図」に共通する凡例が記載される。東西南北には四箇所にか形磁石方位があり、二寸（約6cm）／一町（109m）の方眼が引かれていること等から、藩に上納した清図の控であろう。②の「浜分」の凡例に「文化五辰年三月、但文政年中麻植郡桑村森清助相頼写取」と記されることから、徳島藩の測量方の岡崎三蔵の配

下にいた絵図方の森清助¹⁴⁾が文政年間に①を写した絵図であると考えられる。①と②の表現筆致は同じ精度であるが、②の田・地面畠等の緑と薄ねずみ色一色であり、①で薄緑では彩色し、田や畠の印を施していることや侵食谷の崖や水路の表現方法がことなる。

また、③の表現内容はかなり粗く、専門の絵図師による筆写ではなく村方で①を写した絵図と考えられる。さらに、④は②とは松並木や河谷部の表現がややことなるが、全体としては表現内容・様式が酷似しており、②からの写で、森清助による複数の写と推定できる。

図5は②を徳島県立文書館が撮影した精密画像から作成した「在所」のトレース図である。「寛文四年（1664）郷村高辻帳」¹⁵⁾によれば、複合扇状地が発達する地形環境の影響を受けて、本村の石高510石余の内、田方は20.0%、畠方が80.0%と、畠卓越型村であった。図5からは、「在所」では東の大久保谷川と西の伊沢谷川や吉野川沿いに荒地や原野が広く分布する様子が読み取れる。

『伊沢村史』¹⁶⁾には「正廣林」（図5の北西部の伊沢谷川右岸の小倉原村付近の原野・荒地）、「松枝林」、「丸山林」（図南西部で伊沢谷川左岸の網掛付近）、「焼場林」、「東条林」（図南東部の大久保谷川

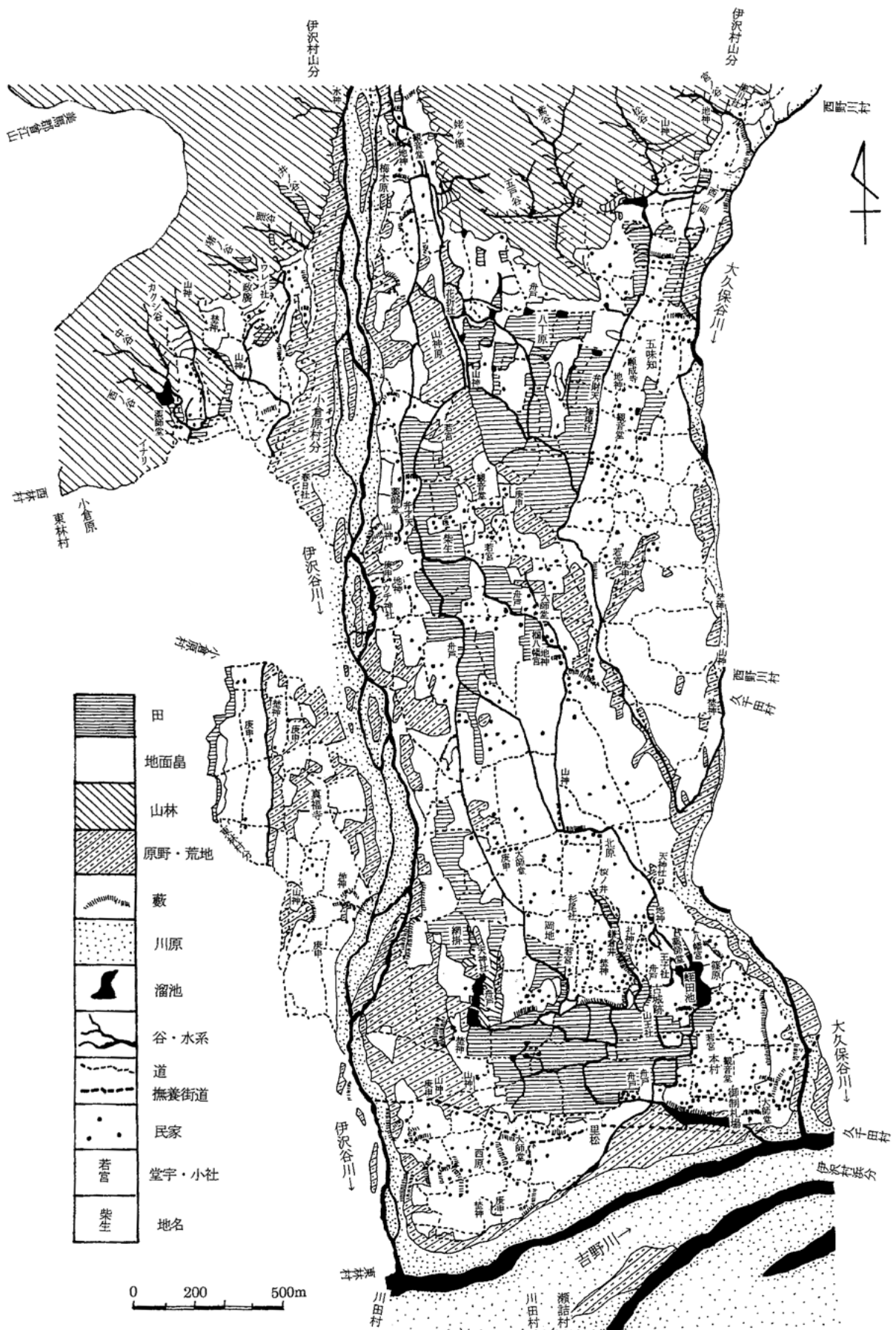


図5 文化五年（1808）阿波郡伊沢村分間絵図（里分）トレース図（個人蔵，260×189cm）

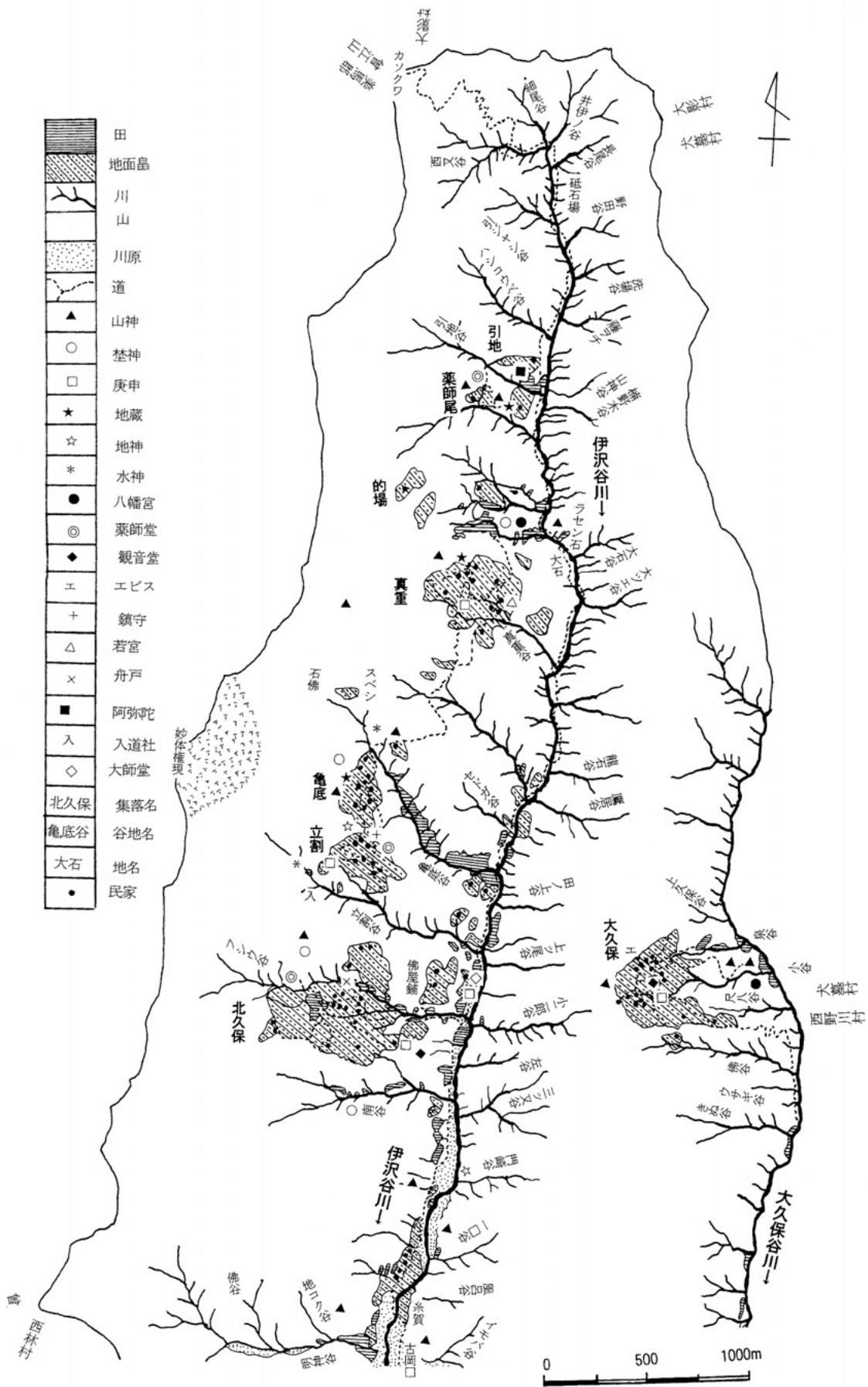


図7 文化五年(1808)伊沢村分間絵図(山分)トレース図(個人蔵, 355×202cm)

左岸付近),「真福林」(井沢谷川右岸の字福寺付近)等の林野が記され,図6(1964年の空中写真)の原野・荒地の分布と重なる。地面畠(常畑)は伊沢谷川と大久保谷川扇状地面に広く分布する。文化期では湧水や伊沢・大久保谷から引く小規模な用水以外には開田できる土地は限られていたことが本図から読み取れる。

次に田の分布をみると,吉野川氾濫原に位置する南部の扇端湧水に依存する「伊沢田」と,阿讃山麓からの「新用水」,「梅木原用水」,「山神用水」,「願成寺用水」¹⁷⁾に依存する田が南北に広がる。図5には「蛭田池」西方にある「古城」(伊沢城跡)上方の侵食谷に「鎌倉井」と「桜ノ井」の湧水が記されるが,『伊沢村史』¹⁸⁾にはその上方に「鍛冶屋井」があり,三つの湧水で田約四町を灌漑したとされる。図5には溜池が18箇所ほどみえるが,『伊沢村史』¹⁹⁾によれば,「蛭田池」,「天王池」,「天王上池」,「薬師谷池」,「西岡池」,「法華寺池」が記されるが,この他に小池が165箇所あったとされる。

図5にみえるランドマークは宗教施設76,地名25で合わせて101を数える。内訳は願成寺1,庚申10,山神・埜神各9,舟戸・地神各7,大師堂・若宮各6,観音堂4,薬師堂・水神各3,八幡宮2,稲荷・春日社・弁才天・花折社・明神・杉尾社・王子・天王・礼神・山王・天神・ウチ神社各1である。「浜分」には水神など10の堂宇・小社と「入道須加」,「渡」等がみえる。

図6に1964年撮影の里分南部の空中写真を示した。図5と比較すると,①伊沢谷川扇状地の扇端の段丘崖は林野におおわれており,その比高は約11~15m(縮尺1万分の1の阿波市全図No.2による),東西約1.5キロである。その扇端面の標高44.6m付近に伊沢城跡が見られる。②文化期の藪や雑木林が黒く示されており,1964年段階ではかなり残存していた。③扇端湧水谷には侵食谷が発達しており,蛭田池や字網掛には溜池が構築される。④吉野川の沖積低地には旧河道が蛇行し(字大道北・前島付近),撫養街道北側には字伊沢田の湿田地帯が黒く広がる。⑤扇状地面(図6)では扇頂の標高82mから扇端の46mには北から南に藩政期の用水路が4筋流下しており,田を潤している。⑥藩政期の道や地割り,

堂宇・小社の位置関係を図6に貼紙で示した。

2) 伊沢村山分絵図

図7に「山分」のトレース図を示した。「山分」は南北約7kmの伊沢谷在岸の東斜面に「引地」,「薬師尾」,「真重」,「亀底」,「立割」,「北久保」と,大久保谷在岸の東斜面にある「大久保」の集落が立地する。地面畠(常畑)が卓越するが,右岸の亀底谷にまとまった棚田がある以外は,右岸の薬師尾,的場と伊沢谷底部に小規模な棚田が立地する程度である。「山分」にみえるランドマークは堂宇・小社48,谷地名41,集落地名等が11で合わせて100を数える。谷地名の内,特に伊沢谷左岸に20(大石谷・小二郎谷・三ッ又谷等),右岸は13(セドガ谷・フシウ谷・南谷・明神谷等),大久保谷右岸は7(小谷・尺八谷・佛谷・ウサギ谷・きぬ谷等)で,本図から里山・奥山と生活空間である集落や谷等の近世の名称が明らかになる。

堂宇・小社は,山神14,庚申5,地藏4,埜神・観音・薬師・水神各2,エビス・アマダ・大師・若宮・舟戸・石佛各1で,山地集落のため山神が多いのが特徴である。美馬郡曾江山境に鎮座する「妙体権現」は絵図には社叢が描かれて,聖なる空間を示している。凡例には「妙体権現高直立三百七十間(約673m)」と記されるが,妙体山の標高は785mであるので,絵図の測量基準点を標高112mの扇頂部に設定したと推定できる。

堂宇・小社と集落との位置関係をみると,山神・埜神は集落上方の里山(薪炭等の稼山や肥草山)に,庚申・地藏・舟戸・若宮・観音堂・薬師堂・鎮守は集落中心部やその上部に,水神は亀底谷や立割谷のような谷筋に鎮座することがわかる。さらに,集落を結ぶ生活道路や伊沢谷底筋の道,美馬郡曾江山と大影村を結ぶ峠道(標高620m)が描かれている。

「浜分」,「在所」,「山分」(縮尺1/1,800)に描かれるランドマークの総数は213を数える。宗教施設134(62.9%),谷地名や小字を主とする地名等79(37.1%)で,郡図(縮尺1/18,000)にみえる伊沢村34よりはるかに多い。「伊沢村分間絵図」から得られる絵図情報は近世後期の地形や土地利用を中心とする自然環境や文化的景観,「砥石場」,「大石」(真重)にみられるような自然崇拜的な場所という

宗教・民俗景観にまで及び、その資料的な重要性がわかる。

4. おわりに

阿波郡や伊沢村を対象とする近世絵図史料を素材として、内包される絵図情報をトレース図化して、過去の歴史空間である郡や村域の歴史的景観を復原してきた。この上に、関連する地方文書史料とのクロス分析が求められるが、伊沢村の検地帳、新開検地帳等が現存していないので、これ以上に掘り下げるには限界があった。しかし、近世の地方絵図史料は文献史料とは異なり、これを克明に解読することから徳島藩領の郡や村の景観や生活空間を明らかにしてくれる貴重な歴史史料であるといえる。

注・文献

- 1) 藩領や郡域，組村，藩政村，土地空間等の歴史的領域や歴史的領域の景観には地形のような自然景観，棚田・段畑のような土地利用，土地割のような社会・文化景観，地名，宗教・民俗景観等の様々な構成要素がある。
- 2) 溝口常俊「近世社会と空間」，杉浦芳夫編『シリーズ人文地理学8 歴史と空間』朝倉書店，2006，40～42頁。水本邦彦『絵図と景観の近世』校倉書房，2002。近世絵図に表現される空間情報や小書（注記）を読み取る場合に，トレース図を作成することが絵図の表現内容や作成目的を知る上で極めて有効である。
- 3) 大塚信男氏蔵の手書き・彩色の見取り絵図で，縮尺は約1／15,000程度，105.0×153.7cm。本図は湯浅隆「村のなかの社と寺」国立歴史民俗博物館編『神と仏のいる風景』山川出版社，2003の口絵写真で紹介されている。
- 4) 国文学研究資料館蔵蜂須賀家文書『阿波国画図』（1202）手書き・見取り図，彩色，234×150cm。
- 5) 近世の郡域や藩政村内に所在する寺院・神社・堂宇・小社等，村人の信仰の対象となったものを総称して宗教施設とする。前掲3）湯浅129～131頁。大塚活美「郷祭りにおける複数村落祭祀の成立」『国立歴史民俗博物館研究報告第98集 神社祭祀と村落祭祀に関する調査研究』2003，30～31頁。
- 6) 佐野之憲編・笠井藍水訳『阿波誌』，歴史図書社，1976，257～262頁。
- 7) 神道大系編纂会編『神道大系神社編四十二 阿波・讃岐・伊予・土佐国』1989，5～7頁。
- 8) 前掲7）。
- 9) 阿波町史編纂委員会編『阿波町史』1979，242～244頁。
- 10) 拙稿「徳島藩の分間郡図について」徳島地方史研究会『史窓』第26号，1996，2～25頁を参照されたい。
- 11) 明治19年（1886）～24年（1891）に参謀本部陸軍部測量局（後の陸地測量部）により作成された縮尺20万分の1の軍事用の全国地図。
- 12) 拙著『山村地域の史的展開—徳島県勝浦郡上勝町—』教育出版センター，1981，473～480頁。
- 13) 大内家本は大内龍雄氏蔵で「大内所蔵，阿波郡伊沢村，三枚之内九・十・十一」と裏面に記される。永井家本は徳島県立文書館が精密な写真複製版を作成しており，本稿のトレース図は写真版から作成した。富永家本は富永哲夫氏蔵で裏面に「文化五年三月，阿波郡伊沢村分間絵図，一之部，二之部，三之部」と記される。森文庫本は徳島県立図書館蔵で同館により写真複製版が作成されている。
- 14) 森 清助（文久2年・1862没）は山瀬佐蔵とともに岡崎三蔵測量隊の中心人物で実測の「文政十一年阿波御国図」の作成者である（拙稿「江戸時代阿波国絵図の歴史地理学的研究」『史窓』34号，2004，120～121頁）。
- 15) 国文学研究資料館蔵蜂須賀家文書（679）「阿波国郷村田島高辻帳」。
- 16) 伊沢村役場編『伊沢村史』1928，314～315頁。
- 17) 前掲16）319頁。
- 18) 前掲16）319頁。
- 19) 前掲16）319～320頁。